



▲9月に収穫したコシヒカリを  
献納  
宮内庁から届いた賞状を手に  
する仁木さん ▶



津山の人・物・技術  
など、明日誰かに自慢  
したくなる津山のいい  
ところを紹介します

ええとこ  
いっばい

津山

15  
つやまじまん

慢

市内で22年ぶりの新嘗祭献穀者  
仁木 紹祐さん (山方)

平成5年(1993)から稲作経営を開始し、地元スーパーに直接販売するなど、独自に販売先を開拓。その後も設備の拡充や機械の大型化などを続け、経営規模を拡大。津山市農業士、津山市農業委員会委員を務める。50歳。

献納を終えて

新嘗祭とは、毎年11月23日に皇居で行われる神事。全国各地から献上された農産物を天皇陛下が神々にお供えになり、自らもお召し上がりになります。令和3年は岡山県を代表して、仁木さんが新米を献穀しました。

「大変光栄な役割と感じました。天皇陛下には、わたしが20代の頃、全国農業青年クラブの会長をしていた時に拝謁し、食事を御一緒させて頂きました。当時を思い出して、真心込めて献穀させていただきました」と振り返ります。献穀を終え「津山地域の米や稲作に、注目が集まるきっかけになってほしい。全国的な米価下落など、農業を取り巻く環境が厳しい中、明るい話題で津山地域を元気にしたい」と心境を語ります。

仲間とのつながり

ライスセンターを経営しながら、地域の農家と協力して地域農業の発展に貢献しています。「農業経営者が集まる場で、情報交換や意見交換を続けてきました。ただ、農家は個々の経営。作業を助け合うことがなく、農業経営者が減り続ける中、活動に限界を感じていました。最近になり、仲間6人と一

若い農家を支援したい

今後について「担い手が育つ環境づくりを仲間と一緒に手掛けたい。わたしと同じ担い手農家(専業農家)は県内でわずか5%。とても危機感を覚えています。最近、全国の若者とSNS(会員制交流サイト)を通じて、農業技術の指導を始めました。若い農家の成長速度は早い。農業を志す若者が、安心して農業に取り組むことができる環境を作り、津山地域の農業を盛り上げていきたい」と笑顔で語りました。

若い農家を支援したい

今後について「担い手が育つ環境づくりを仲間と一緒に手掛けたい。わたしと同じ担い手農家(専業農家)は県内でわずか5%。とても危機感を覚えています。最近、全国の若者とSNS(会員制交流サイト)を通じて、農業技術の指導を始めました。若い農家の成長速度は早い。農業を志す若者が、安心して農業に取り組むことができる環境を作り、津山地域の農業を盛り上げていきたい」と笑顔で語りました。

つぶき  
編集室

子ども観光ガイド育成塾を取材しました。高校時代、通学のため自転車で毎日走った城東地区ですが、子どもたちと一緒に歩いたり話を聞いたりすると、知らないことがたくさん。どんなに素敵なものも、気付けなければ無いのと同じ。まず自分が良さを知り、伝えていかなくてはと強く感じました。

姪(めい)と初詣。お参りの後は魅力いっぱい屋台。引き寄せられる甥(ねい)に対し、年齢が大きくなったせいか迷っている姪。「しんちゃん」と背中を押すと、笑顔で走り寄ってボールすくいに挑戦。悩んで決めたリング(鈴)とブドウ飴で口の周りを真っ赤にして笑う二人の姿に、ほっこりした新年の幕開けでした。

津山自慢で取材した仁木さんから、田植え機の説明を受けました。運転席のセンサーが土の状態を判断し、真つすぐな田植えをするそうです。ただ、数センチ単位の操作をする仁木さんは、センサーが必要ないと話していました。技術の進歩は目覚ましくても、人の能力にはかなわないことを知りました。